

科学研究費助成事業（基盤研究（S））事後評価

課題番号	18H05218	研究期間	平成30(2018)年度～ 令和4(2022)年度
研究課題名	尊厳概念のグローバルスタンダードの構築に向けた理論的・概念史的・比較文化論的研究	研究代表者 (所属・職) (令和6年3月現在)	加藤 泰史 (椋山女学園大学・国際コミュニケーション学部・教授)

【令和6(2024)年度 事後評価結果】

評価		評価基準
	A+	期待以上の成果があった
○	A	期待どおりの成果があった
	A-	一部十分ではなかったが、概ね期待どおりの成果があった
	B	十分ではなかったが一応の成果があった
	C	期待された成果が上がらなかった
<p>(研究の概要)</p> <p>本研究は、尊厳概念について多角的、総合的な視点から考察し、欧米圏中心に進められてきた尊厳概念理解と、非欧米圏、特に東アジアにおける「生命の尊厳」概念を架橋することでグローバルスタンダードを構築しようとする研究である。</p>		
<p>(意見等)</p> <p>尊厳概念の多角的分析を目指して、ドイツ思想史を底流とする尊厳概念に依拠しつつ、非欧米圏の尊厳概念の検討作業を丁寧に行いながら多くの論文集を刊行した点は高く評価できる。これらの著作によって尊厳概念のグローバル・スタンダードを構築する基盤の解明という目標がどこまで達成されたかは明確といえないが、新型コロナウイルス感染症の影響に直面する中、尊厳概念の課題としてトリアージの問題を検討した点は、社会的関心の高い具体的課題への尊厳概念の適用事例として貴重な試みであったと評価できる。</p>		